

森山動物園の大きなテーマに添った挑戦でもあり、絶滅が危惧されているイヌワシ保全への動物園としての寄与を模索する活動でもありました。このような取り組みが認められ、現在当園は日本動物園水族館協会からイヌワシの種別計画管理園に指定されています。

自然豊かな大森山の環境で命をつなぐイヌワシが、野生イヌワシのために貢献できたり、大森山の自然の中に造られたケージでイヌワシが飛ぶような夢が叶えば、世界に発信できる動物園になるでしょう。

地域に根付くもう一つの動物保全活動を紹介します。2003年、園内にある湖沼「しおひきがた塩曳潟」で、秋田淡水魚研究会の協力を得て行った水生生物調査で発見された日本固有の稀少淡水魚、ゼニタナゴです。20年ほど前までは12都県に分布していましたが、その後急速に数を減らし、現在では東北4県の局所的にしか確認されておらず、環境省と秋田県が絶滅危惧IAに指定しています。塩曳潟は生息地を公表する唯一の湖沼です。ゼニタナゴが激減した理由は様々ですが、ここに生息してきたゼニタナゴは大森山公園と動物園が環境保全の役割を果たし、守られてきたとも言えます。動物園は後世にこの希少な生き物を残すべく、同研究会の力も借りながら保全活動を継続していくべきと考えています。活動の柱は、展示による普及と塩曳潟に隣接



ゼニタナゴの保全活動



ゼニタナゴ

する保全池でのふ化・育成・放流です。こうした活動を知り、賛同した民間からの資金援助などもあり、自然と関わろうとする動物園の活動は少しずつ広がりを見せています。活動は同研究会により生息域内保全例として日本魚類学会へ報告されるなど、専門家の間でも話題になっています。

大森山動物園は、豊かな自然に包み込まれ存在する施設です。イヌワシとともに地域の自然との関わりを大事にした息の長い活動は、必ずや他の飼育動物の展示に重なってくるはずで、命を預かる動物園、自然とともに息づく動物園が大事にし続けなければならないものが、そこにあります。

大森山動物園の前身の動物園は、本市における観光の本丸とも言える城址公園の千秋公園にあった児童動物園でした。県内一のにぎわい通りに接し、常に人が集まる場で、児童動物園は、にぎわいづくりの一翼を担っていました。その動物園が市の南西部に移設され、新たに整備された公園につくられた動物園は当時、市民の憩いの場となる公園施設として捉えられていたようでした。

開園から約10年、新たな施設整備を進めるにあたり、財源確保の手法は観光施設の整備を目的としたものでした。しかし、当時の秋田は未だ動物園が観光資源であるという意識は浸透しておらず、動物園への投資目的や整備の効果は、子どもたちの心を豊かにし、家族が憩う場づくりであるという、児童動物園から引き継いだ変わらぬ意識を大事にし続けていたのです。

近年、交流人口の拡大が重要施策として取り上げられる時代、自然環境や生命への意識変化もあり、動物園を



チンパンジーの森



アソヴェの森



フラミンゴのガラス展示



ヤマアラシのピクリ出窓



動物パレード



おねがいヒントマン



ミルヴェンジャー7



夜の動物園



雪の動物園



アンカ



キリン

動物トレーニング

2. 観光

新たな魅力で 観光拠点としての再生

大森山動物園の役割は、大森山動物園条例の中に、動物のいのちをつなぐ場、いのちを学ぶ場、そして動物との出会いを楽しむ場とあります。動物園は感動的な動物との出会いで心を癒し、レクリエーションとして一時を楽しみながら過ごす、感じ、感動を味わう観光の施設です。開園以来、動物園は集客を一つの大きな指標としてきました。時代とともに人々の感動も変化し続けています。また、少子高齢化が観光に与える影響も大きいものがあります。観光施設として、これまでと現状をみながら再生について展望してみたいと思います。

一つの観光資源として捉える時代に変わり始めました。秋田市でも十数年前から、動物園を重要な観光施策の柱の一つとして動物園への投資も始まりました。

2000年以降、チンパンジーの森や王者の森の整備に着手しました。また老朽化した公園と動物園の基盤整備や研修ホール、動物病院、宝くじ協会からの資金で造られた大型遊具「アソヴェの森」など、近年整備された施設は数多くあります。そして公園と動物を統合した再整備のため、2009年には大森山自然動物公園整備構想づくりに着手しました。現在は、それに基づいた公園と動物園の再整備事業が進められるようになり、加えてにぎわいづくりのための事業が推進されるようになるなど、40年間の歴史の中、2000年以降における観光振興等を目的とした動物園への投資は決して小さなものではありませんでした。

観光資源の拡充で大切なことは、何を伝え、何を感じてもらいたいかを意識し、伝え手の情(こころ)を明確に伝えることです。意識や心の形を表現することは難しいことですが、大森山動物園が10年近く掲げ続けているテーマ

「動物と語らう森」は、ハードとソフトの両面で統一感のあるサービスが提供できるようになってきています。

動物とお客さまのより近い出会いづくりは、動物の中を通り抜けて見学するアソヴェの森や手が届きそうなほど間近に見えるフラミンゴのガラス展示、ヤマアラシのピクリ出窓など、スタッフのアイデア、工夫を体感できることが大森山動物園の特長でもあります。また、「ふれあいフェスティバル」や「夜の動物園」、「雪の動物園」など春夏秋冬を通したイベント、「まんまタイム」や「エサやり体験」など毎日開催しているイベント、さらには動物と飼育員との距離を伝える動物トレーニングの公開など、「動物と語らう森」のテーマに添いながら進化を続けています。

動物園は野生動物を見てもらうことが魅力ではありますが、「動物と語らう森」をテーマに掲げた大森山動物園の情(こころ)を伝えることも重要であると考えています。飼育員と動物、お客さまが一体感を持てる場の強化が大森山動物園の重要な戦略とも言えます。

これは、公園を含めた観光資源の再整備を進めるための大事なキーワードの一つでもあります。